

山口西田読書会 2019年6月15日のプロトコル

1. テキスト

「内部知覚について」94頁9行目から95頁4行目まで。

2 テキスト要約

「現在」は「無限なる経験内容の統一点」であると共に「唯一の实在界」の統一点である。知識（反省）にとって「現在は達することのできない極限」と考えられるが、それは同時に「知識の理想が自己自身を完成し行く」ことでもある。しかし「現在は無限なる内容を有って居る」が故に「何處までも之を言い尽すことはできない」。他方直覚にとって「現在は直接に与えられた意識の中心として、最も明らかなるものでなければならぬ」とされる。

一つの物を見る時、「此物は赤い」「此物は重い」というように「一步一步の意識作用は明らか」であるが、「此作用は無限の層を成す」。しかしこれは主語が個物の場合である。主語の内容が単純であれば現在は達すべからざる極限ではなく、我々は却って現在より出立するという考えに近づき、さらに「主語なき文章」では「我々は現在其物を直に言い表わす」と考える、とされる。これに対し「我々が此物とか彼時とかを言い表わす時、その内容が無限となると共に達することのできない極限となるのである。

「主語なき文章」とは命令文や感嘆文、そのほか日本語に多く見られる文章のことであろう。その表現は直接的ないし直観的である。「美しい!」「悲しい!」などはまさにそうしたものであろう。これに対し主語が個物になると、現在が達することのできないものとなるのは理解され得る。しかし「主語の内容が単純」な場合とはどのような場合であろうか。個物が主語の文章と主語のない文章以外の全ての言語表現がこれにあたるであろう。まず個物でないものとして普遍概念が考えられるであろう。個物の場合は判断の無限系列が考えられるが、普遍概念の場合は判断の有限系列で済むことになる（「平行四辺形は二組の対辺が並行である」など）。さらに西田は「単一なる内容ならば、前の瞬間においても、後の瞬間においても変じ様はない、過、現、未の区別すべき様もない」としている。個物について語られたものでない全ての表現は普遍的なものと言い表わしたものであるから、本質的に同じことが言えるだろう。また個物について語られたものでも、「我々の意識内容が抽象的に限定せられた時」は「現在」は過、現、未で変じ様がないとは言われないにしても、「現在は延長を有する馬鞍の如きものと考えられる」ことになる。例えば「私は水が飲みたい」などがそうである。私が本当に何がしたいのかは分からない。それを「水が飲みたい」と限定することは抽象的である。しかし「水が飲みたい」と思っている間は馬鞍の上にいる如くに「現在」である。続いて「之に反し働く自己の立場に於いては」とあるのは「我々の意識内容を抽象的に限定」しない立場である。そうした立場において現在の「何であるか（ティ・エステイ）」は（反省にとって）「無限の深底にして達し得べからざるもの」ということになる。この「現在」は現在でありながら、同時に過去と未来を含むものである。過去現在未来が区別されながら一つになっているものである。その意味でアリストテレスの「ティ・エーン・エイナイ（有りつつあったところのもの：未完了過去）」であり、かつ「ティ・エスタイ・エイナイ（有るであろうところのもの）：未来」である。

三

ここでは判断の主語と知る自己との関係、さらに詳言すれば「論理的主語、形而上学的本体、認識主観」の関係が論じられる。アリストテレスは『形而上学』第7巻（Z巻）冒頭で「あるというのは多くの意味がある（ト・オン・レグタイ・ポラコース）」と述べる。西田の「我々は種々なる意味に於いて有というものを考え得るであろう」はこれを受けたものと考えられる。アリストテレスは同巻第3章（西田は2章としているが3章の誤り）で、ウーシアを（1）ト・ティ・エーン・エイナイ（essence, 本質）（2）ト・カトルー（universal, 普遍）（3）ト・ゲノス（genus, 類）（4）ト・ヒュポケイメノン（substratum, 基体）の四つの意味に分類している。西田はウーシアをここでは「实在」と訳していると考えられる（後の所では「本体」となっ

ている)。ウーシアはエイナイ（有る）の現在分詞ウーサから派生した語で、アリストテレスでは「真にあると言えるもの」というような意味であったと考えられる。それは後の *existentia*（現実存在、がある）と *essentia*（本質存在、である）とが合わさったものであった。このウーシアがラテン語（ボエティウス訳）で *substantia* または *essentia* とも訳されるようになり、これが現代語において *substance* (*Substanz*) となり、日本では西周がこれを「実体」と訳した。これに対しヒュポケイメノン（*ὑποκειμενον*）は「基に措かれたもの」というのが元の意味である。前後の脈絡で主語、基体と訳しうる。これがラテン語（同じくボエティウス）で *subiectum* と訳され、後に *substratum* と訳されるようになった。西田はウーシアをヒュポケイメノンであるとしているが、これはアリストテレスの見解の全てではない。

3. 哲学的問い

真にあると言えるものは何であるか。